涸沢錦秋

保健学科同窓会

保健学科同窓会の沿革

保健学科同窓会

1. 保健学科同窓会の沿革

(1) はじめに

信州大学医療技術短期大学部を母体として、2002年（平成14年）10月に医学部保健学科が誕生した。そして、2003年（平成15年）4月の1期生入学の機を捉えて「保健学科同窓会」が立ち上がった。保健学科同窓会設立までの経緯について、その概要を記しておきたい。

1974年（昭和49年）6月7日に信州大学医療技術短期大学部が、「看護科」と「衛生技術科」の2科をもって開学してから、看護科は「看護学科」に、衛生技術科は「衛生技術学科」へと呼称をかえ、更に「理学療法学科」、「作業療法学科」と「助産学専攻科」を包括した信州大学医療技術短期大学部へと発展してきた。保健学科は、医療技術短期大学部を母体として改組により誕生した。医療技術短期大学部としての28年4ヶ月間は決して短い歳月ではなかったが、この間の歩みは「張りつめて、前進し続けた」という言葉に凝縮される。看護学、検査技術科学、理学療法学、作業療法学、そして助産学という近代医学が生んだ新しい医学医療の分野が、学問として体系化され、成熟に要した年月だった。丁度、新しい酒が、それを入れるべき新しい革袋を必然的に要求するように引き寄せたものであって、この度の保健学科新設は、決してその逆ではない。

このあたりの詳細は、保健学科の歴史の項に委ねたい。医療短大は28年4ヶ月の歳月を経て、2002年（平成14年）10月に「信州大学医学部保健学科」が誕生し、翌2003年（平成15年）4月、新設された信州大学医学部保健学科に1期生が入学してきた。

医療技術短期大学部には、これまで学科単位・取得ライセンス単位の同窓会組織がそれぞれ独自の活動を展開してきた。また、医療短大の学習環境等に資するために学生の保護者による「後援会」組織がバックアップ体制を敷いて来た。その中で歴史が古い順に「桐の木会」、「臨嶺会」、「州嶺会」そして「アルプス会」について、また保護者による組織である「後援会」について概要を記したい。保健学科同窓会は、これ等の上記の5組織を母体として設立されたのです。

・≪桐の木会≫：

信州大学医学部附属助産婦学校は、1963年（昭和38年）に定員20名のところ、9名の志願者全員が入学してスタートした。全寮制であったが、元兵舎の跡を活用したもので、不便なものであった。老朽化した木造であり、「冬季は蒔ストーブで暖をとった。」と記録されている。

1963年（昭和38年）に医学部に附属設置された信州大学医学部附属助産婦学校の時代の卒業生から医療技術短期大学部助産学特別専攻の卒業生と、現保健学科看護学専攻で助産学のコースを修めた者および在校生、さらには大学院医学系研究科保健学専攻看護学分野、大学院総合医理工学研究科保健学分野母子保健学ユニットの院生および修了生までを包括した同窓会が「桐の木会」である。保健学科同窓会分科会の中で、最も歴史が古い「桐の木会」であるが、「桐の木会」の名称は、初代の学校長であった岩井正二教授（産婦人科学教室）が名付け親で、『学校所在地が「桐」であること、桐の木はすくすく素直に伸びる木であること、等々に綾かったものである。』と、助産婦学校一期生で桐の木会の三村妙子初代会長（日本看護協会・長野県看護協会名誉会員：故人）が記している。三村妙子初代会長は、年1回の総会・勉強会の開催、そして隔年ごとに会誌「桐の木」を発行してきており、「桐の木」の最新号は第25号として2019年（平成31年）3月に発行された。1970年（昭和45年）に就任した唐沢里子第2代「桐の木」会長に次いで1972年には吉沢さち子第3代会長が就任するなど会長が交代したが、1974年（昭和49年）には第4代会長として三村妙子初代会長が再就任し、1990年（平成2年）に第1回桐の木セミナーを開催し、以降も2011年（平成23年）まで継続開催して第10回を数えるなど、桐の木会の発展に大いに貢献した。2005年（平成17年）には、三輪百合子第5代会長（現長野県看護連盟会長）が就任し、就任翌年の2006年（平成18年）には医療短大助産学特別専攻の閉校記念事業を企画し、記念式典・祝賀会を挙行した。また、2013年（平成25年）には第47回桐の木会総会に併せて、「助産師教育50周年記念事業」を開催するなど、精力的な活動を展開して来ている。

・≪臨嶺会≫：

1966年（昭和41年）4月に定員20名の医学部附属衛生検査技師学校が開校し、5月の連休明けから授業が開始された。1971年（昭和46年）に「衛生検査技師・臨床検査技師等に関する法律」が施行され、第1回臨床検査技師国家試験が実施された。第1回の国家試験ということで、獣医師・薬剤師、そして衛生検査技師としての研鑽を積み、特例講習を受講した衛生検査技師が、挙ってこの国家試験を受験した。この国家試験の終了日に併せて、同窓会準備会を開催し、卒業して

信州大学病院中央検査部に就職したばかりの４期生の川上由行（現信州大学名誉教授・特任教授）を準備会代表に選出した。翌1972年（昭和47年）３月26日に、第一回同窓会設立総会を開催し、川上由行準備会代表を初代同窓会長に選出した。

衛生検査技師学校が６期生まで、臨床検査技師学校が２期生で幕を閉じ、医療技術短期大学部衛生技術科が設置された。短大部には衛生技術科以外に看護科があり、今後は短大卒業生が新たな同窓会を設立するのであれば、同窓会加入への呼び掛けは遠慮すべきか、と考えた。これまでの看護学校には同窓会組織がなかったことからも短大部の衛生技術科の学生への呼び掛けに躊躇した。この点について、初代短大部主事（当時はこのように呼称し、医学部長が併任した）の柿崎勉医学部長（泌尿器科学教授）と医学部長室で意見交換した。柿崎主事は、松本医学専門学校、松本医科大学、信州大学医学部と変遷しても医師を養成する教育機関としては同一であり、松医会として一本化している。臨床検査技師の養成機関としては、各種学校も短大も総て一緒であり、これまでの同窓会組織の中に短大卒業生も仲間に入れることに全く問題はない、と理解を示された。このことが、医学部保健学科になっても同窓会組織は一つになってまとまるべきだという方向性へ進む契機となった。

現在は、医学部附属衛生検査技師学校、医学部附属臨床検査技師学校、医療技術短期大学部衛生技術科、衛生技術学科の卒業生、保健学科検査技術科学専攻の在校生および卒業生、大学院医学系研究科 保健学専攻医療生命科学分野、および総合医理工学研究科医療生命科学ユニットの院生および修了生をも臨嶺会は包括している。

当初は毎年の総会を開催したが、その後、４年ごとに夏のオリンピック開催年に開催してきている。2016年（平成28年）９月20日には、50周年記念の臨嶺会総会を奥村伸生第２代会長（医療短大第１期生で現保健学科教授）の元で開催した。特別講演は、川上由行初代会長と、勝山努元病院長・副学長・現丸子中央病院長であった。多数の現職教員も参画するなか、和やかなうちに進行した。

なお、総会は夏のオリンピック開催年に合わせて開催されているが、同窓会誌の「臨嶺会報」は年１回の発行で会員相互を結ぶ絆としてすっかり定着している。

〈19〉 2016年9月15日（木） タウン

講演する勝山さん（奥）

信大 臨床検査技師養成50周年

臨嶺会が記念総会

松本市旭の信州大学医学部保健学科検査技術科学専攻の在校生・卒業生らでつくる臨嶺会（会長・奥村伸生教授）は、同大医学部付属衛生検査技師学校として開校してから50周年を迎えるのを記念し、10日、約80人が参加し、同校舎で、開校50周年記念臨嶺会総会を開いた。

前会長の川上由行さんと、同大付属病院の元院長の勝山努さん（現・丸子中央病院院長）が記念講演。川上さんは、当時の写真をスライドで見せながら、入学試験、学費すべて無料で白衣も支給された学生時代を振り返った。

勝山さんは、「臨床検査技師は全診療科と関わりがあり、病院全体が見える。技師は医療環境の変化にもっと関心を持ってほしい」と話した。

廊下には臨嶺会会報や、国家試験前に作成される卒業文集「太陽」や創立以来のアルバムが並び、学生時代を懐かしんだ。

県内唯一の臨床検査技師養成校で、卒業生は約1800人。年1度発行の臨嶺会報で、臨床検査技師としての活躍やさまざまな近況報告を載せているほか、卒業後10年ごとに同級会を推進し交流を図っている。

信州大学における 衛生検査技師 臨床検査技師 養成 50周年

信州大学における衛生検査技師・臨床検査技師養成は、昭和41年に設置された医学部附属衛生検査技師学校に始まり、医学部保健学科検査技術科学専攻として発展してきました。さらに、平成19年には大学院教育も開始されました。

これら養成校の卒業生と大学院修了生からなる同窓会が臨嶺会です。約1800名の卒業生が全国の医療・研究・教育の場で活躍しています。

50年のあゆみ

昭和41年（1966年）信州大学医学部附属衛生検査技師学校設置
昭和47年（1972年）信州大学医学部附属臨床検査技師学校設置
昭和49年（1974年）信州大学医療技術短期大学部衛生技術学科発足
平成14年（2002年）信州大学医学部保健学科検査技術科学専攻設置
平成19年（2007年）信州大学大学院医学系研究科保健学専攻設置

臨嶺会
〒390-8621 松本市旭3-1-1

50周年記念式典のタウン情報掲載記事
講演するのは勝山努名誉教授

・≪州嶺会≫：

1986年に信州大学医療技術短期大学部理学療法学科および作業療法学科の第１期卒業生が輩出された。その３年後の平成元年1989年（昭和64年）12月に１

期生から４期生までの計141名を正会員とし、一期生の百瀬公人初代会長（現：保健学科教授）を選出し、州嶺会は発足した。

「州嶺会」は年1回、11月下旬から12月上旬の土日２日間で研修会・懇親会・総会を長野県内で開催している。土曜の夜に開催の懇親会では、懐かしい同窓生との思い出話、近況報告、そして年代を超えた先輩後輩の交流の場として、例年大きな盛り上がりを見せている。

また、年1回のペースで同窓会誌「州嶺会報」を定期発行し、研修会報告などを掲載するなど会員相互間のコミュニケーションにも大きく貢献して来ている。

医療技術短期大学部の在校生卒業生に加えて、保健学科理学療法学専攻・作業療法学専攻の在校生および卒業生、大学院医学系研究科保健学専攻理学・作業療法学分野 および医療生命科学分野、総合医理工学研究科の成人保健学ユニット、老年保健学ユニットの院生および修了生をも包括する組織である。

1998年（平成10年）には、州嶺会創立10周年の記念式典／祝賀会を、初代百瀬公人会長（現保健学科教授）の元で開催し、昨年2018年（平成30年）9月16日（日）には、第５代の森本正道会長の元で、州嶺会設立30周年記念式典/祝賀会を開催した。医療技術短期大学部の初期に講義や実習等でお世話になった望月一郎元教授、牛山喜久名誉教授、富岡詔子名誉教授、佐藤陽子名誉教授らも交えて盛大に開催された。

・≪アルプス会≫：

本学における看護師の養成は古く、1929年（昭和４年）に設置された松本市立病院附属看護教習所にまで遡る。その後、1945年（昭和20年）に松本医学専門学校附属看護婦講習所、1950年（昭和25年）に信州大学医学部甲種看護婦養成所、そして、1952年（昭和27年）信州大学医学部附属看護学校を経て、医療技術短期大学部へと繋がってきた。しかし、同窓会結成についての歴史は最も浅い。

母校に医療技術短大看護学科の卒業生である小松万喜子助手（現愛知県立大学教授）、柳澤節子助手（講師、助教授を経て准教授へ昇任）、山崎章恵助手（現清泉女学院大学教授）の３名が教官として揃ったのを契機に、1993年から立ち上げに奔走した。既に卒業生が、1,000人を超えていたことから、先ず取り掛かった名簿作りが実に大変な作業であった。これら小松助手、柳澤助手、山崎助手の３名の献身的な労力とそれを支えた３名の情熱がアルプス会の設立をもたらした。

1995年（平成７年）5月13日（土）に旭会館において設立総会を開催し、会の名称を「アルプス会」に決定し、医療短大１期生であった小高玲子初代会長を選出した。医療技術短期大学部看護科と看護学科の卒業生を包括して発足した「アルプス会」であるが、保健学科看護学専攻の在校生および卒業生、大学院医学系研究科保健学専攻看護学分野、総合医理工学研究科保健学分野の院生および修了生をも包括する「アルプス会」は、年１回の総会・講演会・懇親会、そして年１回の同窓会報「アルプスだより」を発行して会員相互間の連携を密に活動してきている。設立の歴史は浅くても擁する会員数は既に四千人の大台に乗っている最も大所帯の組織である。

・≪後援会≫：

学生生活や教育環境改善への支援を目的に、2000年（平成12年）1月1日に後援会が設立された。後援会の構成員は、正会員（学生の保護者）と賛助会員（教員、同窓会員）であった。発足は、医療技術短期大学部の四年生化が急速に現実味を帯びてきた頃に重なる。当時の短期大学部長の宮坂敏夫教授（後の初代保健学科長で名誉教授）が、塚本隆是教授の後任として医学科産婦人科学教室から看護学科へ赴任した飯沼博朗教授へ相談したのが契機となっての誕生であった。医学科同窓会「松医会」の会員でもある飯沼教授は、医学科と医学科学生へ対して有形無形に支援をする「松医会」に相当する組織の必要性を感じていた。学内委員会の中でも総務委員会は、諸規定の制定改廃の原案作成や予算の内部配分計画の立案、教官の併任の審議などを担う委員会であるが、差し当たって後援会組織の受け皿となる委員会が短大組織にはないことから、飯沼教授は総務委員長の立場で、総務委員会を受け皿として位置付け、毎月の委員会で審議を重ねて後援会設立を目指した。審議が煮詰まり短大教授会の了承も得る中で、畑山喜美枝会長・有賀憲輔副会長を選任して後援会組織を立ち上げた。理事には、同窓生である「看護のアルプス会」、「助産の桐の木会」、「検査の臨嶺会」、「理学・作業の州嶺会」の各代表が加わり、総務委員長が常任理事として会務に携わった。なお、設立総会までの当面の運営資金として、医学科同窓会「松医会」から10万円の資金の提供を受けた。また、後援会に入会する際には、バッジを入会金の領収書に添えて配付した。その写真を右に示す。

ここに、後援会の規定を残しておきたい。

信州大学医療技術短期大学部後援会会則

（名　称）

第１条　信州大学医療技術短期大学部（以下「本学」という。）に後援会を置き、信州大学医療技術短期大学部後援会（以下「本会」という。）と称し、事務所を会長宅に置く。

（目　的）

第２条　本会は、本学における教育事業を援助して、本学の発展と教育効果をあげることを目的とする。

（事　業）

第３条　本会は第２条の目的を達成するために次の事業を行う。

一　本学教育事業の後援

二　本学の対外活動に対する援助

三　その他本会の目的を達成するために必要と認めた事項

（会　員）

第４条　本会は次の会員で組織する。

一　本学に在学する学生の保護者を正会員とする

二　その他本学各同窓会等本会の事業に賛同する者を賛助会員とする

（役　員）

第５条　本会に次の役員を置く。

一　会　　長　　１名

二　副 会 長　　１名

三　理　　事　　１２名　(内１人は常任理事とし、同窓会から４人)

四　監　　事　　２名

五　顧　　問　　若干名

（役員の任務）

第６条　役員の任務は、次のとおりとする。

一　会長は、会務を総理し、会議の議長となる。

二　副会長は、会長を補佐し、会長事故ある時は、その任務を代行する。

三　理事は、事業計画、予算、決算、会則の変更、その他の重要事項を審議する。

四　常任理事は、会計を担当する。

五　監事は、会計を監査する。

六　顧問は、会長の諮問に応ずる。

（役員の選出）

第７条　役員の選出は、次のとおりとする。

一　会長及び副会長は、理事会において正会員理事の中から選出する。

二　理事・監事は、会員の中から選出する。また、各同窓会は１名の理事を推薦する。

三　顧問は、理事会において推薦する。

（役員の任期）

第８条　役員の任期は、２年とし再任を妨げない。

２　役員に欠員を生じた場合は、補充することができる。

第９条　役員は、任期が満了した場合においても、後任者の決定までは引き続きその任務を行うものとする。

（会　議）

第10条 本会の会議は総会及び理事会とする。

2　理事会は、必要に応じて会長がこれを招集する。

3　通常総会は、毎年1回開催する。ただし、会長は必要が生じた場合臨時総会を開催することができる。

4　総会では、事業計画、予算、決算、会則の変更、その他重要事項を審議決定し、会員へ報告する。

5　顧問は、理事会に出席し、意見を述べることができる。

6　会員は、臨時総会の開催を会長に要請することができる。

第11条 会議の議決は、出席者の過半数をもって決し、可否同数の時は議長の決するところによる。

（経　費）

第12条　本会の経費は、入会金及び会費並びに寄附金をもって充てる。

第13条　入会金3,000円、会費20,000円とし、子弟の入学時に納入するものとする。

2　専攻科については、入会金3,000円(本学卒業生は除く)、会費5,000円とし、子弟の入学時に納入するものとする。

（事業計画及び予算編成）

第14条　本会の事業計画及び収支予算は、毎会計年度開始前に常任理事がこれを編成し、理事会の議決を経て総会の承認を得るものとする。

2　事業計画及び収支予算を変更した時は、前項の規定を準用する。

（収支決算）

第15条　本会の収支決算は、毎会計年度終了後すみやかに常任理事が作成し、会計書類及び事業報告書と共に監事の意見を添えて理事会に提出し、総会で承認を得るものとする。

（会計年度）

第16条　本会の会計年度は、毎年2月1日に始まり、翌年1月31日に終る。

（現金の保管）

第17条　本会の現金は、会長名義で預金し、その通帳は、常任理事が保管する。

（帳　簿）

第18条　本会に次の帳簿を備える。

一　会則
二　会員名簿
三　役員名簿
四　現金出納簿
五　会議録及び事業記録等

（雑　則）

第19条　本会の運営については、別に定める。

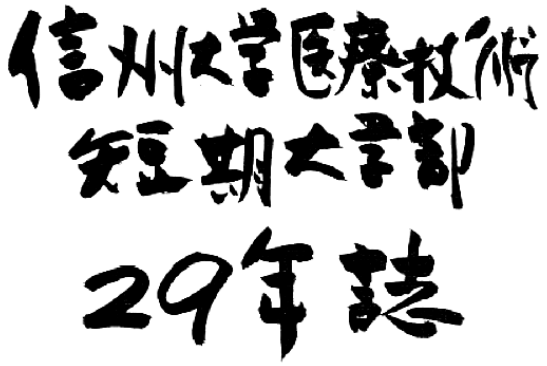
附　則

1　この会則は、平成12年1月1日から施行する。

2　第13条の定めにかかわらず、平成12年1月1日在学中の3年生及び専攻科の保護者は、入会金3,000円、会費2,000円、2年生の保護者は入会金3,000円、会費4,000円、1年生の保護者は入会金3,000円、会費7,000円とする。

3　平成11年度の事業計画及び収支予算の編成は、第15条の定めにかかわらず、この会則制定後速やかに行うものとする。

飯沼総務委員長の定年が迫り、後任に指名された川上由行総務委員長が引き継ぐことになった。後援会の会計を担当する後援会常任理事としての川上総務委員長は、飯沼前総務委員長の意向には反するが、宮坂短期大学部長のご理解を得て、常任理事就任と同時に、後援会の終焉へ向けて歩みを加速させた。つまり、独自に展開されてきた「桐の木会」、「臨嶺会」、「州嶺会」、「アルプス会」を包括する「保健学科同窓会」の新たな立ち上げと後援会の解体とをセットで行ない、これまでの「後援会」の機能を併せ有する保健学科同窓会の設立こそが、新たに発足する医学部保健学科の発展に益する、と考えて理解を得るために奔走した。保健学科設立の現実化に歩調を合わせるように、後援会所有の資金を、信州大学医学部保健学科の「設置」、「門標上掲式」、「記念式典」、「祝賀会」や「記念講演会」、及び「信州大学医療技術短期大学部29年史」の出版費用等に拠出するなど、総ての資産を使い切り、残金無しの状態で、後援会の終焉を迎え、新たに設立される「保健学科同窓会」へ「後援会」の使命を託すこととなった。



写真は、29年史の表紙に揮毫された、宮坂敏夫教授（第６代医療技術短大部長／初代保健学科長学科長で現名誉教授）の味のある字である。

なお、学生と医学科を支援し、保護者を繋ぎ、医学科を側面から支える応援組織として「医学科父母会」が設立されたのは、医療短大で学生の保護者や同窓生、教職員で構成する「後援会」が発足した2000年から６年後の2006年（平成18年）のことだった。「医学科父母会」は、同窓会「松医会」と連携することで、母校への支援基盤がさらに強力になったが、保健学科では、学科や専攻単位で発展してきた同窓会組織、「桐の木会」「臨嶺会」「州嶺会」「アルプス会」を一つに統合し、更に「後援会」をも包括する大きな「保健学科同窓会」組織の設立により母校への支援基盤を固める方向へと進むことになった。

（2）保健学科同窓会

・医療短大後援会の終焉と学科専攻単位の同窓会組織の統合

保健学科へ移行した時点では短大の在学生がいる。全員の卒業まで医療短大は存続する。したがって、短大の在学生が全員卒業するまでの学生生活を快適に過ごすためにも、新たな保健学科1期生からの収入が不可欠になる。この保健学科の学生からの収入母体を、従来の《後援会》として行なうか、新たに設立を目指す《同窓会》として行なうかであり、ここで、この《後援会》も《同窓会》もいずれも「新たに」会則制定を行い「新たに」設立される保健学科に立ち上げることが前提となる。後援会組織はともかく、1期生が卒業どころか入学もしていないのに《同窓会》というのは如何なものか、という観点からのご意見があった。しかし、《後援会》も、1期生が入学していない段階では、当然のことながらその父兄も1人も居ないことは同様である。したがって、この論理では、どちらの立ち上げも、困難さは全く同様なのである。

ある一定額を徴収し、現在の短大生と保健学科の新入生に益する有効活用の考え方を引き継ぐには、保健学科一期生入学時のタイミングで《保健学科同窓会》を立ち上げ、これまでの《後援会》で行なってきた内容もこれから立ち上げるこの《保健学科同窓会》の中で対応していくようにするのが自然の流れではないか、と考えた。

具体的には、新入生からの６万円徴収を考えた。うち3万円は従来の《後援会》としての位置付けで使用し、2万円は各専攻（看護学・検査技術科学・理学療法学・作業療法学）固有の同窓会（保健学科同窓会分科会）活動への支援金としての使用する。そして、残りの1万円が保健学科全体での同窓会のための使用目的とすることである。この、ポリシーは、微妙な変遷があるものの、大筋で引き継がれて今日に至っている。

同窓会員は、保健学科の在校生・卒業生、そして教職員（特別会員）とし、保健学科1期生の入学後の早い時期に、医療短大在校生、保健学科1期生、短大時代の各学科の卒業生にも声を掛けて、同窓会設立総会を開催し、その第1回総会で、新しい保健学科同窓会の門出を祝うことを考えた。その第1回同窓会総会時に同窓会定款・役員その他を決定するという流れをイメージした。つまりは、保健学科の同窓会（専攻単位での

信州大学医療技術短期大学部
後　援　会・理　事　会

平成14年12月20日（金曜日）1:30PM～
信州大学医療技術短期大学部第1会議室

1．　畑山 後援会長挨拶

1．　宮坂 短期大学部長挨拶

2.協　議　事　項

（1）信州大学医療技術短期大学部後援会の今後について（資料1）

（2）保健学科同窓会を立ち上げに関する事項について（資料2）

（3）保健学科同窓会会則（案）について（資料3）

（4）保健学科同窓会会計細則（案）について（資料4）

（5）　平成14・15年度役員について

資料（5）

前回の理事会・総会でご承認いただいた予算面の確認事項（等）

◎　大学関係
（1）信州大学医療技術短期大学部の閉校に際しての、
《医療技術短期大学部29年誌》の発刊補助（平成16年3月末出版予定）
2,300,000円

◎　大学・学生関係
（1）医学部保健学科設置記念講演会補助（短期大学部在校生全員が参加）
（2002年10月25日ホテル・ブエナビスタ孔雀の間）　1,200,000円

第一部：柳田邦男「いのちを見る眼－ 患者の視点・医療者の視点－ 」

第二部：パネルディスカッション
「21世紀の医療を支えるコメディカルの役割と教育」
司　　会：玉井真理子（医学部保健学科助教授）
パネリスト：柳田　邦男（ノンフィクション作家）
迫田　朋子（NHK解説委員）
森田　孝子（医学部保健学科　教　授）
木村　貞治（医学部保健学科　教　授）

（2）本学との提携大学である、カ－ ティン工科大学（オ－ ストラリア）との連携に要する費用の補助
700,000円

◎　学生関係
（1）図書室開館時間延長・大学授業開設期間の月曜日～金曜日（5:00－7:00PM）
1,000円/時間　×5日×32週　　320,000円/年
（2）医療技術短期大学部図書室の二次デ－ タベ－ ス使用
医学中央雑誌デ－ タベ－ ス　　320,000円/年
（3）医療技術短期大学部専門課程用図書購入費補助
看護学科・専攻科　400,000円
衛生技術学科　200,000円
理学療法学科　100,000円
作業療法学科　100,000円
800,000円/年

△　その他（保健学科同窓会組織を立ち上げるための必要経費等）

分科会的同窓会組織から構成される）に、短大時代の同窓会組織が加わっていくのが自然だと考えた。あるいは、短大時代の同窓会が、保健学科の在学生・卒業生を仲間として迎い入れていくことこそが理想だと考えた。

集金した6万円のうち3万円は《後援会》と同様の使途であることから、在校生（短大生と保健学科学生）がこれまでと同様に、学生生活における益を享受することが可能となる。短大時代と異なり、今まで以上に学生は全国から集う。そして、卒業後は全国へ散らばっていく。同窓会組織は、将来の就職活動や転職活動、学術的繋がりのみならず、その他の諸々の人的情報には無くてはならないものになっていくはずで、父母や保護者が構成員である後援会では、このようなことを望めるはずはない。何より、新入生が入ってくるこの時期を逃しては、同窓会組織の立ち上げは困難で、このタイミングしかない、と考えた。

以上の観点からの考え方を、文章化し、総務委員会、短大教授会での審議を経て、後援会理事会・総会を短期間に複数回にわたり開催する中で、保健学科に新たな後援会組織を立ち上げるのではなく、保健学科同窓会を立ち上げて、短大時代の既存の同窓会組織との融合を図りながら本学が発展していく、という方向性が確認された。

後援会の解体と、保健学科同窓会設立へ向けて、短大教授会では提出された資料に基づいて以下の内容が審議されて最終的に承認された。

1）保健学科同窓会設立の必要性
2）「桐の木会」、「臨嶺会」、「州嶺会」、そして「アルプス会」融合の必然性
3）同窓会設立の時期
4）同窓会費の設定とその使途案の提示
5）同窓会会則案の提示
6）その他

短大教授会での審議と並行させて、平成14年度9月20日に開催された理事会・定期総会では、14・15年度の役員選任、事業計画、後援会費の分配、等々の議事に加えて、「保健学科後援会の今後について」を議題として提出した。審議は難航したが、なんとしても年度内に方向性を決めなければ、との思いで苦慮した。そして開催された12月20日（金）の、この年度

２回目の理事会・総会で、漸く後援会の終焉と保健学科同窓会へバトンタッチする方向性が承認された。

前ページの資料は、後援会の終焉を最終決定した最後の理事会の記録の一部である。資料（5）には、後援会保有資産の最後の使途が示されている。保有資産を総て使い切り、残金無しでの終焉となった。

そして、並行審議されてきた短大教授会での承認も経て、これまでに難航してきた流れの中で、医療短大後援会の解体と並行して保健学科同窓会設立へと一気に進んで行くこととなった。まさに、後援会の機能を併せ有する保健学科同窓会を、これまでの「桐の木会」、「臨嶺会」、「州嶺会」、そして「アルプス会」と融合させて発足させるのは、新入生を初めて迎え入れる一期生入学時が将にベストのタイミングであった。

なお、特に、保健学科同窓会定款・会則の原案作成に際しては、医療短大の第13代村山忠勇事務長と第14代平林敬史事務長（後の医学部事務部長・副医学部長）のお二人には献身的なご協力を賜ったことを記しておく。

「後援会」と「桐の木会」、「臨嶺会」、「州嶺会」、「アルプス会」の５組織統合による「保健学科同窓会」の設立

「保健学科同窓会」は後援会としての機能を担いながら、年一回の総会・講演会および同窓会報「同窓会だより」を発行するなどの活動を展開してきている。また、「桐の木会」・「臨嶺会」・「州嶺会」そして「アルプス会」は分科会としての位置づけで、独自の会報を発行するなどの従来の活動を継続して展開している。

2003年（平成15年）7月、保健学科同窓会設立総会が開催された。最後の医療短大後援会理事会で、畑山喜美枝会長・有賀憲輔副会長から指名されて医療短大教授会からも承認された川上由行同窓会開設準備委員長が初代の保健学科同窓会長に選任され、また、同窓会長以下の新規役員も、保健学科新入生からの学生理事５名を含めて全員が選任された。そして保健学科同窓会は、2003年（平成15年）4月に遡っての発足となった。産声をあげた「保健学科同窓会」は、学生諸君からの新鮮な意見を大切にしながらの明朗運営を心掛けて今日に至っている。設立総会では、医療短大の最後の短大部長で初代保健学科長であった宮坂敏夫名誉教授による「死生学雑感」と題しての講演を拝聴した。その後、附属病院東10Fビュー270へ会場を移し、保健学科教員各位に加えて望月一郎先生、山田喜紹名誉教授をはじめ懐かしいお顔や、保健学科在校生、医療短大在校生、そして卒業生との懇親会で交流を楽しむことが出来た。ここで、卒業生や、元教員の特別会員の先生方には、同窓会発足後一年目の実情を把握していただき、今後の同窓会運営へのご意見を賜ることが出来た。未成年の在校生も出席することからアルコール類を提供しないポリシーの基に、このスタイルは現在の「ティーパーティ」へと継承され、在校生、卒業生、現職教員との交流の場となっている。

信州大学医学部保健学科が第二期生を迎えた2004年（平成16年）4月から、信州大学は「国立大学法人として歩み始めた。また信州大学小宮山淳学長から、各学部・学科単位の同窓会組織を包括する「信州大学同窓会連合」の結成が提起され、「発足準備会」の段階から保健学科同窓会も「信州大学同窓会連合」のメンバーとして加わった。

まだ発足まもない保健学科同窓会であったが、2004年（平成16年）には同窓会ホームページを開設し、同窓会報≪保健学科だより≫の発行、カーティン工科大学短期留学の支援活動、図書費の補助、卒業祝賀会の補助、キャンパス見学会の補助、銀嶺祭や松本ぼんぼん等の学生課外活動の支援等々、よちよちながらも確実な歩みをみせた。

また、2004年度（平成16年度）の定期総会の開催に際しては、当初は後援会組織の立ち上げと運営に精力的に貢献された飯沼博朗元教授に特別講演を依頼し、飯沼先生も病の手術を講演後に延期するなど、直前まで講演の準備をされていたが、直前になってから、講演を急に辞退されることとなった。飯沼先生ご本人が、一番楽しみにしていただけに、実に残念な辞退であった。突然の辞退に急遽、基礎作業療法学講座の冨岡詔子教授（現名誉教授）に懇願して、特別講演「くらしを創る－生活を紡ぐ作業療法の技と心」を拝聴することとなった。突然の依頼を快く承諾してくださった冨岡教授には感謝であった。

この2004年（平成16年）の夏の異常な暑さに苦しんだ学生さんの強い要望により、同窓会では扇風機40台の購入予算の計上を承認して、保健学科への寄贈により各教室に配置することが出来るようになった。本質的な解決にはならないものの、翌年からの暑さ対策に扇風機は、耐震改修講義が終了して全教室に空調設備が整うまで大活躍した。

保健学科同窓会設立後、同窓会と保健学科の共同主催で、講演会や公開シンポジウム等を開催してきたが、2007年（平成19年）の同窓会総会時の市民開放講演会で「障害者をめぐる『常識』の嘘」を星加良司先生（東京大学先端科学技術研究センター）に依頼したときから、『口述筆記』と『手話通訳』を行なうことにし、2019年（令和元年）に開催された田中紀子先生（一般社団法人ギャンブル依存症患者を支える会代表）による「誤解だらけのギャンブル依存症」にまで継承され、多くの市民の参加も得てすっかり定着し現在に至っている。

なお、2007年（平成19年）の鎌田實先生（諏訪中央病院名誉院長）による大学院保健学専攻修士過程設立記念講演会「命を支えるということ」、および2009年（平成21年）の武藤芳照先生（東京大学大学院教育学研究科長・教育学部長）による大学院博士前期過程・後期過程設置記念講演会「健康スポーツ医学の実践と教育」のいずれの特別講演の座長も川上由行同窓会長が務めた。

以下に、同窓会設立後から本年までに同窓会の主催で実施した講演会・公開シンポジウム等について一覧表で示す。

保健学科同窓会主催・共催の講演会／公開講演会／公開シンポジウム一覧

開催年度	講演の標題	講演の講師
2003年 平成15年	死生学雑感	宮坂敏夫名誉教授（初代保健学科長）
2004年 平成16年	くらしを創る－生活を紡ぐ作業療法の技と心	冨岡詔子教授（現名誉教授）
2005年 平成17年	ホスピスケアを考える ≪公開シンポジウム≫ [I]女性として生きていく－支援の現場から ・性差医療と女性外来 ・フェミニスト・カウンセリングの力 [II]エイズ・性感染症予防講座 －大切なあなたにささげる解体性書－ ・HIV感染者として ・コンドームの達人が語る目からウロコのエイズ・性感染症予防講座！	季羽倭文子先生（ホスピスケア研究会顧問） 天野恵子先生 （千葉県衛生研究所所長・東金病院副院長） 河野貴代美先生 （お茶の水女子大学ジェンダー研究センター教授） 川田龍平先生（松本大学非常勤講師） 岩室紳也先生（地域医療振興会・ヘルスプロモーション研究センター長）
2006年 平成18年	山への想い－あこがれから行動へ	尾沢洋先生（登山家・エッセイスト）
2007年 平成19年	害者をめぐる「常識」の嘘 ≪公開シンポジウム≫: [I] わたしたちの望む最期を支える ・一般病棟における最期を支える ・ホスピス・緩和ケアにおける最期を支える ・特別養護老人ホームにおける最期を支える ・在宅における最期を支える [II] ハンセン病の過去・現在・未来 ・なぜ医療は病人を見捨てたのか～回復者の立場から～ ・ハンセン病の歴史が看護教育に問いかけるもの～看護職が果たすべき倫理的責任と生命倫理～ ・重監房へ～無知から始まる旅～ 《大学院保健学専攻修士過程設立記念講演会》 ・命を支えるということ	星加良司先生（東京大学先端科学技術研究センター） 太田智奈美先生（松本協立病院） 石黒理加先生（愛和病院） 宮島渡先生（アザレアン真田） 橋爪睦先生（諏訪日赤ホスピスレインボー） 伊波敏男先生（作家・患者） 吉澤千登勢先生 （山梨大学大学院臨床倫理学講座） 宮坂道夫先生（新潟大学保健学科） 鎌田實先生（諏訪中央病院名誉院長）
2008年 平成20年	動脈硬化と再生医療	池田宇一先生（信大大学院医学系研究科教授）
2009年 平成21年	多様性の宇宙へ―障害者問題から環境問題を読み解く― 《大学院博士前期過程・後期過程設置記念講演会》 ・健康スポーツ医学の実践と教育	安積遊歩氏先生（CILくにたち援助為センター代表） 武藤芳照先生（東京大学大学院教育学研究科長・教育学部長）
2010年 平成22年	脳性まひのリハビリテーション－まなざしからひろいあいへ－	熊谷晋一郎先生（東京大学先端科学技術センター特任講師・小児科医）
2011年 平成23年	老いの時代－震災を生きるということ	伊藤英樹先生　宅老所「井戸端げんき」代表

開催年度	講演の標題	講演の講師
2012年 平成24年	地域で共に生きるということ 保健学科10周年及び大学院保健学専攻完成記念式典記念講演会 命を大切にするまちづくり－健康寿命延伸都市・松本の創造－	海老原宏美（NPO法人自立生活センター東大和理事長） 菅谷昭 松本市長
2013年 平成25年	「死」なんて、もっと遠いものだと思っていた－大切な人を亡くすということ。医療者との関わりと。－	朱亀 佳那子 先生 （フリーランス編集者・ライター）
2014年 平成26年	アメリカにおけるダウン症の人のための医療最前線 信州大学医学部地域保健推進センター設立記念式典・講演会: Well-being（幸福・健康）な地域づくり	ブライアン・スコトコー 先生（マサチューセッツ総合病院医師） 近藤克則 先生（千葉大学予防医学センター）
2015年 平成27年	ALS的ハッピーライフ	酒井ひとみ先生（ALS患者・日本ALS協会理事）／川口有美子先生（NPO法人さくら会理事・日本ALS協会理事）
2016年 平成28年	なくした人とつながる生き方 ～死別の悲しみから希望を紡ぐ～	尾角光美先生（一般社団法人 リヴォン代表）
2017年 平成29年	2年3カ月を駆け抜けた重い障害をもつ子との日々	佐々百合子先生（一般社団法人「NAOのたまご」代表）
2018年 平成30年	「認知症にやさしい社会」を考える～認知症の人の声を聞きながら～	町永俊雄氏（福祉ジャーナリスト、元NHK福祉ネットワーク キャスター）
2019年 令和元年	誤解だらけのギャンブル依存症	田中紀子先生（一般社団法人ギャンブル依存症患者を支える会代表）

同窓会後援会、総会の複数会場での同時視聴と交互討議

同窓会講演会は、保健学科との共同主催での開催で、市民開放で行なわれている。市民以外にも、多くの在学生も出席するため、旭総合研究棟9Fに加えて地域保健推進センターとで同時に視聴でき、相互の意見交換も可能な環境の中で開催されて来ている。なお、本年の令和元年の講演会・総会は、地域保健推進センターと、保健学科311講義室とを結んでの開催だった。例年、総会には保健学科長（同窓会名誉会長）からご挨拶を戴いているが、2017年の総会では金井誠学科長が学会出張でお留守の筈なのに、金井誠保健学科長（同窓会名誉会長）のご挨拶の「生」映像と「生」音声が、なんと大阪からライブで会場に届けられた。

金井誠学科長の強いご意向に基づくこの企画の成功の蔭には、百瀬公人幹事（保健学科教授）と横川吉晴幹事（保健学科准教授）を中心とする同窓会幹事による綿密な事前準備と入念な予備試験があった。大阪という遠隔地からのライブ中継は初の試みで、慎重な上にも慎重に事前検証を行なったが、万が一の予期せぬハプニングも想定し、予めビデオでのメッセージ録画も作成して臨んだ。

幸い、ライブ中継は見事に成功して出席者からの喝采を浴びた。録画撮影した映像音声は、披露される機会を奪われてしまったが、金井学科長の同窓会総会への篤い想いが伝わる挨拶となった。

中校舎正面玄関口への銘版の設置

2002年10月に医学部保健学科が立ち上がり、「信州大学医療技術短期大学部」の銘版の西側に、新たに≪信州大学医学部保健学科≫の銘版が掲げられた。この銘版は、宮坂敏夫初代保健学科長（現名誉教授）の揮毫による書で、何とも宮坂先生らしい温かみが湧き出ている。また、2010年には、大学院医学系研究科保健学分野の修士課程が「博士前期課程」へ改組され、新たに「博士後期課程」が発足したのを記念して開催された「大学院博士前期過程・後期過程設置記念式典」に併せて、銘版を掲げた。市川元基第三代学科長（教授、副学長）に銘版の文字の揮毫を依頼したが、固辞したため、4種類の字体の候補を提示していただき、最終的に決定したのが掲げられている銘版文字である。

写真（上）は、同窓会から寄贈した「信州大学大学院医学系研究科保健学専攻」の銘版の見積書と、写真（下）は、正面口東に掲げてあった「医療技術短期大

学部」の銘版を外して新たに「大学院」の銘版を掲げる、左から市川元基学科長、山沢清人学長、久保惠嗣学部長、川上由行同窓会長である。

御見積書

No.

信州大学医学部 様

下記のとおり御見積申し上げます。

件名：『信州大学医学部保健学科』銘板

株式会社アビックス

〒390-1301 長野県東筑摩郡山形村8230-4

TEL 0263-98-5001
FAX 0263-98-5002

規格：W250*H1300
ベース：鏡面黒銅　文字：赤銅ブロンズ仕上

合計金額：¥191,100

項目	数量	単位	単価	金額
銘名板	1	台	170,000	170,000
取付施工費、諸経費	1	式	12,000	12,000
		小計		182,000

備考

「保健学科同窓会」が展開してきた「在校生」、「母校」への支援活動

在校生の教育支援及び保健学科の運営費補助として、また、学生の課外活動費の補助として支援活動を展開してきたが、以下に主要な支援項目のみを列記する。

「図書購入費」、「学術国際交流推進経費」、「特別講演会経費」、「大学院立上げ活動経費」、「実習指導者連絡協議会経費」、「新入生合宿研修費」「学部卒業・大学院修了祝賀会経費」「卒業生記念品経費」「就職支援経費」「入試広報活動経費」「学生課外活動支援経費」等々である。大学間学術交流協定に基づくオーストラリア・カーティン大学（Curtin University）夏期海外単位認定プログラムや信州大学―シンガポール共和国夏期海外研修保健医療スタディプログラム及び信州大学―ネパール連邦民主共和国夏期海外研修保健医療スタディプログラム等に関わる経費は、学術国際交流推進経費に含まれる。また、オープンキャンパス開催経費等は入試広報活動経費の中に、卒業生一人ひとりに郵送される卒業時の集合記念写真の経費等は卒業生記念品経費に、専攻単位や専攻を越えてのスポーツ大会、また松本ボンボン参加等々、きめ細かな支援活動が行なわれている。

支援活動の中で最も金額が大きい「学習環境支援経費」は、毎年それぞれの専攻単位に一定額を配分していたが、年々厳しくなっていく大学の財政事情の中で、よりよい教育・研究環境で学んでいただくために、学部生と大学院生への教育支援活動として、ある程度まとまった金額の方が、より効率的な教育環境整備に資するとの考え方で、2010年（平成22年）から、毎年度、一専攻づつ順番に支援することとした。初回の支援を受けたのは看護学専攻で、翌2011年（平成23年）は検査技術科学専攻、そして2012年（平成24年）は、理学療法・作業療法学専攻と続き、既に二巡した。僅か300万円程度ではあるが、ある程度まとまった金額が活用可能となり望ましい学習環境整備に多少なりとも近付いたと考えている。既に三巡目に入っているが、保健学科耐震補修工事が北校舎及び中校舎は既に終了したが、南校舎の耐震補修工事が遅れてしまったこと等も勘案して、順番の巡り方に多少の変更が加味されて今日に至っている。

地域貢献の拠点形成と教育・研究環境の狭隘化の改善を目指した『地域保健医療福祉推進センター』設置と老朽化した『芙岳寮』改修への援助活動

4年生化し、更に大学院まで擁して、大幅に学生定員が増員されたのにも関わらず、極めて狭隆な環境下で教育・研究が行われていたのが母校の置かれている状況であった。具体的には、平成14年度に3年制の医療技術短期大学部から4年生の医学部保健学科となり、学生定員ベースで1学年分である160名が増員され、また、平成19年度からは大学院修士課程が、平成21年度か

らは博士後期課程がそれぞれ設置され、現在すでに博士後期課程の3年次生まで進行していることから、定員ベースで90名増員され、学部学生と併せると合計250名もの増員が生じている。そのため狭い実習室での演習や学部生と大学院生がスケジュールを調整しながら研究活動を行わざるを得ない状況など、極めて狭隘・劣悪な教育・研究環境における学習と研究を学生に強いて来ていた。また、単なる狭隘問題の解決だけでなく、保健学科におけるこれまでの地域貢献の実績と看護学専攻、検査技術科学専攻、理学療法学専攻、作業療法学専攻に所属する教員の専門性を生かした地域保健・地域医療・地域福祉などへの地域貢献を推進するための拠点としての「地域保健医療福祉推進センター」の設立を目指すことになった。

本センターは、地域保健、地域医療、地域福祉の推進を目的として、①学生を対象とした教育活動、②地域住民や地域にて活動している医療職者を対象とした公開講座などの教育・啓発活動、③根拠に基づいた実践 (Evidence based Practice,EBP) を推進するための研究活動の組織的展開を目指すものである。本センターにおけるこれらの活動は、信州大学が掲げるPLAN “the FIRST” 2011-2013の趣旨の1つである「地域貢献として、信州の文化・伝統に根差して、地域の人々の教育・福祉の向上に貢献するため大学を地域の人々に開放し、関連各界との緊密な連携・協力を進める」という理念を具体的に展開するための重要な役割を担うものと期待されるものであった。

「地域保健医療福祉推進センター」の設置と運営を企画するワーキンググループと教職員ならびに保健学科同窓会を基盤とする「地域保健医療福祉推進センター設置基金管理組織」が設置された。

写真は、新規に設置された「地域保健医療福祉推進センター」の正面からの姿である。一回のエレベータ前には、趣旨に賛同して資金援助に協力して下さった保健学科同窓生のご芳名を記したパネルが設置されている。母校へお立ち寄りの際には、是非とも、ご自身のお名前をご確認下さい。

芙岳寮は1968年 (昭和43年) に医学部生の寮として建築され、2004年 (平成16年) からは保健学科学生も入寮し現在に至っている。芙岳寮は苦学生の住居として、また、規律ある共同生活を通じて自治の精神を養い、教養を高め、人格の形成の場としても重要な役割を担っている。芙岳寮に対してはこれまで小規模な改修工事は実施して来ているが、建築から半世紀が経過し、建物の老朽化が著しく、早急な大改修が必要となっていた。文部科学省からの耐震改修工事費は耐震補強のみで、生活環境の改善、冷暖房設備の更新、廊下・天井の張替、共有スペース及び居室の改修等、ほぼ全面的な改修への協力要請を保健学科同窓会員および教職員へ協力要請した。なお、今日では、医学科学生より保健学科学生の方が、芙岳寮への入寮生が多くなっているのが実情である。以下に、その際の、保健学科同窓生及び教職員への要請文を示す。

平成２７年８月３１日

信州大学医学部保健学科同窓生各位殿：
信州大学医学部保健学科教職員各位殿：

信州大学医学部保健学科同窓会長
川　上　由　行

信州大学医学部芙岳寮改修事業実施に伴う募金協力についてのお願い

拝啓　時下ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。本学部、特に保健学科の教育・研究に対し、日頃より格別のご配慮をいただき感謝申し上げます。

さて，本学部学生寮「芙岳寮」は昭和４３年に建築され、これまでに多くの医学部生の生活の場として今日に至っております。また、その「芙岳寮」は建築以降、大規模な改修は行われず老朽化が進行して来ております。

この「芙岳寮」へは平成１６年度からは保健学科学生も入寮可能となり、現在では医学科学生より保健学科学生の入寮者の方が多くなっております。平成１６年以降から今年３月までの入寮者数は８７名ですが、内５２名（６割）が保健学科の卒業生が占めています。また、平成２７年８月現在での入寮者４０名中、２４名（６割）が保健学科生というのが実情です。

現在、文部科学省に耐震改修の要求が行われており、これに併せて機能改修が計画されております。しかし、文部科学省からの予算は、老朽化への対応や生活環境の改善等については考慮されずに耐震補強のみです。ほぼ全面的な改修が必要な「芙岳寮」なのですが、寮改修には、文部科学省からの予算の他に相当額の自己資金が必要となります。しかし、大学運営費交付金が年々減額されている現状におきましては、自己資金の捻出は極めて困難であり、信州大学医学部芙岳寮改修基金事業として，同窓生や保健学科教職員の皆様にご寄附をお願いすることと致しました。

つきましては、芙岳寮改修基金事業の趣旨をご理解のうえ、保健学科卒業生そして保健学科教職員の皆様には、ご寄附についてご賛同いただきたくお願いいたします。

保健学科同窓生、教職員の皆様には、昨年度の地域保健推進センター設置基金に引き続いてのお願いで誠に恐縮に存じますが、信州大学医学部芙岳寮改修基金事業へのご協力を是非とも賜りますようお願い申し上げます。

「保健学科同窓会」の≪これまで≫から「保健学科同窓会」の≪これから≫を見据えて

28年4ヶ月の年月を掛けて医療技術短期大学部は、医学部保健学科へと脱皮した。写真は、医療技術短期大学部の黎明期から、現在までの母校の発展を静かに見守ってきた、中校舎前の東側に設置された石碑である。そして、2015年（平成27年）に就任した第5代金井誠学科長により、石に刻されていた「医療技術短期大学部」の文字を「医学部保健学科」へと刻し直して元の場所に再設置された。写真（上）は設置当初の頃の石碑で、写真（下）は、新たに設置し直された石碑である。今後も、母校を、そして保健学科同窓会を、暖かくずっと見守り続けてくれることだろう。

1998年（平成10年）3月21日（土）撮影

2016年（平成28年）8月24日（火）撮影

保健学科同窓会は、会員相互の親睦を図り、母校との連携を保ち、母校の発展に寄与することを目的とし、発展的に解消した後援会組織の思いを継承し、従来の短大時代までの学科単位・専攻単位の同窓会組織を包括して融合発展させていくことを確認して2003年（平成15年）4月に発足した。本会は保健学科在校生および大学院生への教育支援活動や、快適な学生生活を提供するための福利厚生関連を主とするものである。

「保健学科同窓会」は、この学舎から育っていく卒業生の心の拠り所として、また本学科、そして大学院保健学専攻の今後の発展を見守っていく組織としての役割を果たしていきます。さらには、この学科、大学院で学び、巣立っていく卒業生や修了生が、日夜研鑽を続け、将来の医療社会において先駆的な歩みをしていってくれることに期待している。そして、そんな人材を側面から支援していくための組織であり続けたい。

そのために、同窓会分科会の「桐の木会」、「臨嶺会」、「州嶺会」、そして「アルプス会」が、ますます活発に独自の歩みを継続し、それぞれの専門分野の進歩発展に寄与する人材の輩出の後ろ盾になる活動を展開して戴きたい。

保健学科の大学院保健学専攻の「新しい歴史を創っていこう」ではありませんか。「輝かしい歴史を作っていこう」ではありませんか。近代医学によって新しい医学医療の分野に誕生した《保健学》を、より体系的に、より確固たる学問領域へと昇華させて行こうではありませんか。そんな保健学科、大学院を、保健学科同窓会は、これからも応援し続けていきます。